『二升五合』てなんですか。

令和六年一月二十三日　於加茂法話会

なんて、読みますか、「にしょうごんごう」・・・「ますますはんじょう」
飲食店にて・・・・半分になっていたお札。『春夏冬二升五合』・
『春夏冬』は、春夏秋冬の秋がない。つまり『あきない＝商い』に通じます。
『二升』は、一升（ひとます）がふたつで『ますます』。
『五合』は一升（いっしょう）の半分で『はんじょう』。よって『商い、ますます繁盛』。

「応無所住而生其心（おうむしょじゅうにしょうごしん）」「住むところなくして、その心を生ず。」昔、むかし、この「応無所住而生其心」は非常に功徳のあるお経のことばだから、これを唱えなさいと、教わった、拝み屋のおばあさんが、いました。でも、このおばあさんはが、どうしても、「大麦、小麦、二升五合（おうむぎこむぎにしょうごんごう）」
と聞こえてしまってそのように憶えてしまっていました。このため、このおばあさんの所へ願いごとに来たお客のために拝むときも、「大麦、小麦、二升、五合～」と唱えていましたが、いつの間にか、その占い、霊験があると、たいそう評判になりました。お坊さんがおばあさんに興味をもち、訪ねてみると、「おおむぎ、こむぎぃ、にしょうぉ、ごんごぉ～～～！」とやっているではありませんか、そこで、親切心を起こしたこのお坊さんが、これは間違っていると言って、正確に「応無所住而生其心（おうむしょじゅうにしょうごしん）」と言えるように、おばあさんは、このことばをちゃんと唱えることで心が一杯になってしまい。おばあさんが拝んでも、まったく、その霊験が無くなってしまった。

六祖慧能、（六三八年二月二十七日-七一三年八月二十八日）と
唐代の禅僧で、『金剛般若経』を究めたことで有名な徳山宣鑑（七八〇-八六五）の逸話

六祖慧能大師と仰がれる禅僧は若いとき、母を助けて薪を売っては生計を立てていたのですが、ある日街に薪を売りに出たとき、どこからともなく聞こえてくる『金剛経』のこの一文に驚き、それが機縁になってお坊さんになったと伝えられています。「心というものはどこかにじっとして在るものではない。それは一瞬々々に生じては滅し、滅しては生じるものである」と。

徳山がいかにも重そうにして、背中の荷物を下ろすのを見て、その老婆は言った。「背負っておられるのは一体何ですか。」「『金剛般若経』というお経の注釈書だ。」と答えると、老婆はいきなり「あなたが究められた『金剛般若経』には、過去・現在・未来の三世にわたって、心は存在せず空である、と説かれているそうです。あなたはこの餅を、過去の心・現在の心・未来の心の何れの心で食べようとされるのですか。」茶店の一老婆から、思いもよらない質問をされ、徳山は何一つ答えることができませんでした。

徳山に代わって私（道元禅師）が言おう。老婆が先のように問うたならば、徳山は老婆に向かって、「過去・現在・未来心不可得ということならば、私に餅を売りなさんな。」
「過去・現在・未来心不可得ということなら、今どの心で餅を売ろうとしているのか。」
道元禅師様は、「即心是仏、不染汚即心是仏なり。」と示されるように、心はそのまま仏そのものであることを体得しなければならないことを教示されます。

このように、どんなに良いことでも、こころが何事かに捉われてしまうと心の本来の力を失ってしまうということです。水も心も時間も掴めない。

正壽寺住職　呉　定明合掌